
俺がお前の契約者

名前無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がお前の契約者

【Nコード】

N0292S

【作者名】

名前無し

【あらすじ】

この世界には精霊というものが存在する。精霊と契約を交わすことによって様々な力を得ることができ、人々はこぞって精霊と契約しようとした。主人公のテオもその一人。いつか素晴らしき契約者になり人々の役にたちたい、そう思っていた。そして、彼は精霊学校の扉を叩く…………。

少女は待っている

彼女は待っている。

いつかまた、彼女の力を求めてやってくるであろう者を待っている。

自らの力を貸すに値する『資格』と『器』を持つものを待っている。

此処で待っていても、いつ来るはわからない。

それでも彼女は待ち続ける。

自らを求める『資格』を持つ者が訪れるまで、長い間待ち続けている。

力を求め、それを扱うに値する『資格』と『器』を持つ者に自らの全てを捧げるために。

それが彼女の存在意義なのだから………

そのために、彼女は長い時を過ごしているのだから………

彼女は一人待ち続ける

この世界の成り立ち

精霊という存在が、この世界には存在する。

精霊は力を求める者と契約を交わし、その契約主の力になる。

そして精霊によって力を得た人間は、その与えられた力を用いて様々なことが出来るようになるのだ。

簡単なところでは、精霊の力を借りて火をおこしたり、物を凍らせたり

が可能になる。

また、負傷した人の傷を癒したり、病を患った人の病気を治したりもできる。

少し変わったところでいえば、自らの肉体に精霊の力を干渉させて己の肉体を強くしたり等がある。

しかし一番精霊と契約して力を得る際に重要なのは、その契約の際に何を望んで力を得たのか……だ。

精霊と契約した者が単純に力を手に入れたと思えば、求める力を与えてくれる精霊がその者と契約をする。

傷ついた人を癒したいと強く願えば、その力を持つ精霊がその者と契約をする。

契約を望む者の思いが強ければ強いほど、その者と契約を交わす

精霊の力も強くなる。

思いが強ければ扱う力が大きくなり、ただ水を出すだけの力が雨を降らせたり、ただ木々の成長を促進するだけの力が、一晩あれば森を増やしたりできるようになる。

人々を癒したいと強く願う者がいればその力を使い、不慮の事故や重い病で死んでしまった人間すらも生き返らせたりできる。

過去の歴史では、そんな大きな力を持つ者もいたという。

そんな強大な力を持つ者を人々は『賢者』や『英雄』などと呼びその者を讃えた。

そしていつかそんな英雄になりたいと願う者が現れ、精霊と契約を交わし、力を得ようとする。

そのような者が次々と現れて精霊と契約を交わす者が多くなり、この世界はその力により急激に繁栄した。

しかし……精霊との契約をする人々が増えるというのは、必ずしも良いものとは言えなかった。

精霊の力を悪用する者が現れ始めたのだ。

精霊によって得た力を行使して、己の欲望の赴くまま破壊を楽しむ者。

得た力で力無き人々から略奪を繰り返し、富を得ようとする者。

精霊は必ずしも悪い心を持つ者と契約をしない訳ではない。

なかには破壊を望むような、残虐さを持ち合わせた精霊も存在す

る。

そんな精霊達は自らの欲望のために力を求める者とも契約をした。

世界はそれにより混乱に陥り、力無き者はただなにもかも奪われるだけの酷い有様になる。

そしてこの世界の王はそれを嘆き、そんな世の中への打開策として精霊と契約を交わした者達による『騎士団』を結成したのだ。

世界中から集った契約者によって結成された『騎士団』により世界中の混乱は納められ、世界は一旦平和を取り戻すことになる。

しかしこれからもこのようなことにならないとは限らない……そう考えた王はもうひとつ案を考えた。

そう……、

『精霊学校を作ろう』と

学校により精霊への正しき知識を勉強させて、こちらで精霊と契約した者を管理してしまおうと考えたのだ。

そして卒業した契約者達には国の用意した然るべき処置を取り、国の許可無しでは精霊の力を行使できないようにしようと考えた。

こうして王の判断により政策は進められ、いつの日にかこの世界では精霊学校というものが当たり前になり、精霊契約者は国に管理されるようになる。

そして国の管理の元で仕事を任されたり、国の設けたギルドからの依頼を請け負い、この世界に存在する『魔物』と呼ばれる生物を

倒したり、依頼人の要望の品をもってきたり等の俗に言う『冒険者』なる者が現れた。

こうして精霊契約者は管理され気がついたら精霊による医療等の学問の場が設けられ、人々はこぞって精霊学校に入学して学ぶ。

そうして新たな繁栄の道をこの世界はたどっている。

この世界の成り立ち（後書き）

まだ微妙にしかイメージできていないのに、我慢できずに少し投稿してしまった……。

ファンタジーは初めてですのでお手柔らかに。

学院の扉を叩いて

王国にある数多くの精霊学校の中でもここ、フラメル精霊学院は優秀な精霊契約者・通称『魔導師』を沢山輩出している名門高校である。

その膨大な生徒数もさることながら、在籍している指導者達の質も高く、さらに敷地面積も広大で『魔導師』を目指す若者達にとっては憧れの学校だった。

精霊の力を利用した様々な分野のコースも設けられており学べることが大変多く、なによりも精霊契約者志望の者達にとって魅力的である『精霊契約の場』をとっても多く所有しているのだ。

『精霊契約の場』とは名前の通り、精霊と契約するための場所のことである。

通常、精霊達は自分が契約をしたいと思った人間と契約を交わしその力を契約者に貸す。

しかし、今までの歴史から契約者を管理したい王国側にとっては、いつでも何処でもホイホイと契約されては管理ができずに困ってしまうのだ。

そのために設けられたのが『精霊契約の場』であり、人間との契約を望む精霊達はその場所ではしか契約ができない。

そしてそれぞれの精霊学校にはその契約の場所がいくつか存在す

るのだが、なかでもフラメル精霊学院は一際多くの精霊契約の場を設けており、精霊契約者になる一番重要な精霊との契約のチャンスが他の精霊学校よりもある。

この契約のチャンス多いことが、どうして重要かというのにも理由がある。

通常は精霊契約者になりたければ、精霊について学ぶ『学問の部』を修めた者が、次の段階の『技量の部』を修めた後に国家試験を合格して初めて国家精霊契約者『魔導師』として認められることになる。

この過程で『学問の部』は誰でも学べるいわば通常の学校みたいなものであり、学費さえ払えば特に問題なく学ぶことができるのだ。

しかしその次の過程である『技量の部』は精霊の力の扱い方を学ぶ段階になり、精霊と契約しないとその過程に進めないことになる。

これにより、精霊と契約してその力を使役できることが『技量の部』の条件であり、いわば入試にあたる。

しかし、王国により契約を管理されている今の時代、精霊契約者になりたくても自分と契約をしてくれる精霊が見つからない場合がある。

そうなれば当然『技量の部』は学ぶことが出来なくなり、その後の国家試験を受けることもなく国家精霊契約者『魔導師』にはなれなかったことになる。

なので少しでも契約の場が多ければ多いほど、魔導師になれるチャンスが増えることに繋がることになる。

そのような理由からフラメル精霊学院は条件が整っている上に、魔導師への一番の近道として誰もが憧れるのだ。

そんな誰もが憧れる魔導師を目指す少年、テオフラトス・ホーエンハイム（通称・テオ）もそのうちの一人である。

幼い頃に魔物に襲われているところを魔導師に助けられて以降、自分も人々を助ける立派な魔導師になろうと誓った彼も、魔導師への一番の近道であるフラメル精霊学院に入学するための試験を今現在、受けていた。

既に彼は『学問の部』を修めており、残りはフラメル精霊学院に入学して『技量の部』を学ぶだけになる。

そしてその後の国家試験に合格すれば晴れて魔導師になれる……のだが、彼は今とても落ち込んでいた。

「はぁ……あと一箇所しか契約の場所がないよ……」

精霊契約の期間は二週間、その間に用意された契約の場を周り精霊と契約を済ませる。

普通はフラメル精霊学院の用意した契約の場はとても多いので、契約が出来ないというケースはこの学院の場合、極少数である。

しかし、そんな恵まれた環境にありながら彼は、精霊との契約が今だできていないのだ。

「うう……僕はこのまま試験に落ちてしまうのだろうか……」

そう思うとテオは泣きそうになる。

残りの契約の場は一箇所、『神聖なる領域』と呼ばれる深い森だけだ。

精霊契約の場は様々な土地に設けられ、どの土地にも共通しているのがその土地に『魔力』が多いことである。

魔力とは精霊達の力の源であり、精霊達は自分達の魔力を人間に貸し与えることで、人間はその力を自らの力として行使することができる。

そうして魔力を貸し与えることにより、人間に力を貸すことで精霊は自分達は人に危害を加えることはないという意味を伝えた。

その形が契約である。

そうやって精霊達は人間と共存していこうと望んだのだ。

そして契約の際には魔力を多く必要とするので必然的に契約の場は魔力が多く存在する場所になるのだ。

まあ、もともと精霊は魔力の多い場所に多く存在するのであまり関係無いといえれば関係無いのだが……

「ここがラストチャンスだなんて……うう」

地図を開いて場所を確認しながらテオは嘆く。

実はこの『神聖なる領域』と呼ばれる森には、大きな問題が二つあるのだ。

一つ、この森はとても魔力が多く溢れ出しており、その魔力の量からとても高位の精霊しか存在しないこと。

二つ、魔力が多いので精霊だけではなく、危険な魔物も多く潜んでいること。

二つ目の理由はとても危険ではあるのだが、魔導師になるためなら仕方ないとテオも覚悟を決めていた。

だが、それよりも問題なのが一つ目の理由である。

「低位の精霊とすら契約出来なかったのに、高位の精霊なんて……はあ」

精霊には個々に力の差があり、俗に高位と呼ばれるほどの力を持つ精霊は力の低い精霊よりも気難しい。

言うなれば契約しにくいのだ。

そんな訳で精霊と契約がいまだ出来ないテオは、自分が高位の精霊と契約なんて到底無理だろう……と落ち込んでいるのだ。

「でも……行かないよりはましだよね……うう」

口ではそういいながらもテオはさらに落ち込んでいく。

もともと彼は自分に自信があるほうではない。

そのため、魔導師になりたいと精霊学校に入学したこと自体、かなりの勇気が必要だった。

そんな彼が精霊との契約……まして低位の精霊と契約が出来ないのに、高位の精霊との契約に自信なんて持てるはずはなかった。

「諦める覚悟を決めなくちゃなあ……うふ、ふふふふ……」

彼の気持ちは沈んでいくばかりである。

「でもやっぱり……なりたいよなあ……」

そういいながら彼は幼き頃の記憶を思い出す。

あの時魔物から自分を助けてくれた魔導師はとても素晴らしく、格好よく見えたのだ。

そんな魔導師に憧れてテオは立派な魔導師になろうと決めた。

「……やっぱり行くしかないよね」

なにもやらずに諦めるよりかは……そう思いテオは最後のチャンスに賭けようと契約の場を目指すことにした。

立派な魔導師になると決めたのは自分自身なのだから……。

精霊

あれからしばらく歩いてようやくテオは『神聖なる領域』と呼ばれる森に到着した。

森からはテオにもわかるくらいの魔力が溢れている。たしかにこれほどの魔力があれば精霊も沢山いるよな、とそうテオは思った。

精霊とは強い意思を持った『何か』が魔力により、精霊という形を示せるようになった物のことを指す。

何かとは特に決まっておらず、その土地で神様として崇められた神石や神木が精霊になる時もある、ただの草木や年老いた犬などの動物が精霊になることもある。

ようするに魔力が強い所なら精霊が生まれやすいのだ。

昔話の中には深い憎しみを抱いた人間が精霊になったという話も存在していて（あくまでも昔話であり、実際のところはわからないが…）強い意思と魔力があれば精霊が生まれるということになる。

それらの理由もあり、精霊契約の場として定められているこの森は精霊が沢山存在するに値する魔力が溢れているのだ。

森に着いてもテオはすぐに足を踏み入れず、まずは契約に必要な物の準備をしっかりと済ませておく。

精霊との契約に必要な物とは、その精霊との契約の証として使う『装飾品』のことであり、一般的には指輪やネックレスタイプが多

く、少し変わったところでチョーカーやアンクレットなどもある。

ちなみにテオが準備した装飾品はブレスレットだ。

選択した理由はいたって簡単。指輪だと剣などを握る時に感触が違ってくるし、ネックレスだと動きまわるほうなので邪魔になってくる。

チョーカーも考えてみたが、少し気が引ける…なのでテオは装飾品をブレスレットに決めた。

装飾品がないと精霊に魔力を借り受ける際に魔力の通り道となる物がないことになり、魔力供給が非効率的になってしまう。そのために必要な装飾品は、いわば魔力の伝導体である。

一応、装飾品が無くても契約は可能なのだが今回に限ってはそうもいかない。なにせこれは精霊と契約を交わしてくりいわば試験なのだ、契約を交わして来てもそれを証明する物が無ければ失格になってしまう。

装飾品に精霊の魔力を通してもらい、その装飾品に連れ帰った精霊の魔力が通っていることが合格の条件なのだ。

そうしてテオは自分が忘れずに装飾品を持ってきたことを確認し、その他の準備も済ませると覚悟を決めて森に足を踏み入れた。

悠久の時

森はざわめく

新たな来訪者が現れたことを示すように

少女はひとり来訪者を待つ

彼が自らの意思で自分のもとに向かって来ることを信じて

自らに相応しき器の持ち主である彼を、
彼のような存在を待って
いた

「さあ……早く」

少女は待っていたのだ

自らの時が動き出すこの時を

だから少年が自らのもとへ来るのを待つ

「ようやく……ようやくこれで私は……」

彼でなくてはならないのだ、彼の存在でなければいけないのだ

なぜなら、少女の止まっていた時は彼によって動き出すのだから

……

お約束…？

意気込んで森に足を踏み入れてかれこれ三時間は経過したが、テオはいまだに精霊と契約、それどころか精霊に出会うことすらできていなかった。

捜せども捜せども見つからない、鬱蒼とした草木をかきわけ呼びかけてみたりはしているのだがまったくの無反応。

たまに返ってくる返事は精霊のものではなく……

「きゅい い！！」

と、人間が森に足を踏み入れたことによって興奮した魔物ばかり。

「はあ……これで何匹目かなあ……」

嘆息しつつも出てきたモンスターを剣で一切に伏す。頼りない見た目とは裏腹に、テオは意外と腕っ節は良いほうであり、この森に出現する魔物も植物系のわりとポピュラーないわゆる雑魚ばかりなので特に今のところ問題はない。

「腹減った……」

もうそろそろ日が暮れそうである。

森にはいつてから水以外なにも口にせず精霊を捜していたので、さすがにお腹も空いてしまう。

「でも、食べ物はないんだよね……こいつは食えないし……」

足元に転がっているモンスターを見つつ、テオはうなだれた。

基本的に魔物の肉はまずい。

いまテオが倒した魔物も、植物……大根そのものに手足が生えたような見た目をしていて一見食べれそうなのだが、どのように調理してもまずいのだ。

「なにか食べれる物ないかな……?」

とりあえず今はお腹をいっぱいにしよう、続きはそれからだと考えたテオは食べれそうな物を辺りを見回して見る。

「お? あれは食えるんじゃないかな?」

見回したテオの視線の先にはおいしそうな果実がなっている。とても甘くおいしそうなその実は、まるでテオに食べてくださいと言

わんばかりに沢山連なっていた。

「こういう運はいいんだけどね」

苦笑しつつも、空腹のテオは果実の実った木へと歩を進める。

「すごいや……これは凄い美味そう……」

近づいたら広がる甘い果実の匂いに、テオの空腹は限界を迎える。
遠慮なく目の前の果実に手を伸ばし、もぎ取ろうとした。

「ん……あれ？取れ……ない………？」

しかし思ったよりも果実がもぎ取れず、テオは力を入れたり振って
みたりしたのだが、それでも取れる気配がない。

「この……取れてよ……！」

空腹な上、意地になったテオは本格的にもぎ取ろうと踏ん張る。

……と、そんなテオの視界が突然反転した。

「……あれ？」

さっきまで足を踏ん張り力をこめた大地は今はテオの頭上、かわりに鬱蒼とした木々の生い茂り微かにしか見えない青空は足元になっている。

「は！？え！？なに！？」

突然の出来事にテオはかなり驚き、パニックになる。

とりあえず動こうと足を動かして見たのだが、何故か動かない。

「なんで？」

動きすらしらない自分の足元を見ると、なにか植物の蔓のような物で括り上げられていた。

「えーっと……つまり……」

自分に巻き付いた蔓を見たテオは頭をぼりぼりとかきながら、視線で蔓の先を辿ってみる。蔓の先にいたのは……

「……勘弁してください」

テオが先程もぎ取ろうとした果実のなっていた木、それが大口を開けて今にもテオを飲み込もうとしている。どうやら先程の木は木にそっくりな魔物だったようだ。

「はなしてー！！お願いだから食べないでー！？」

自分の置かれている状況を理解したテオは、必死に食べられないようにもがいた。しかし足を縛る蔓の力はまったく弱まらず、木の開けた大口はどんどん近くなりいよいよ危なくなる。

「結局、僕は運が悪いのかよ……」

自分の油断が招いた結果なのだが、こうなると運命のせいにもしたくなる。

「入学も出来ずに人生が終わるなんて、こんなの……すごく悔しいよ………！」

精霊契約も出来ずに魔物に食べられて終わるなんて……そう考えると涙が出てきて、途端に走馬灯のように見送ってくれた家族や友人の顔が思い浮かぶ。

絶対に立派な魔導師になって返ってくる、ありきたりな言葉だったがそう約束してテオは見送られてきた。

「ごめんよ……母さん、父さん………親孝行も出来ずに先立つ不幸を許してください………」

口に放り込まれる瞬間、テオは涙に濡れた目をつむった。

お約束…? (後書き)

仕事が始まり、更新が亀より遅い……………
久しぶりに更新したらなかなかのグダグダ……………
休みくらいは本格的に頑張ります……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0292s/>

俺がお前の契約者

2011年10月8日22時06分発行